

第4回北海道開発協会助成活動発表会・懇談会

各地で展開する地域活性化活動をサポート

(財)北海道開発協会では、非営利の市民団体が行う地域活性化活動に対して平成14年度から助成を行ってきており、その数はこれまでの10年間で74件になります。これらの活動をより効果的にフォローしていくために、平成20年度から、助成を受けた団体の方々に活動成果等を発表していただき、参加者が地域づくりなどについて自由に意見交換するための「助成活動発表会・懇談会」を開催しています。第4回目を迎えた今年度は、平成22年度に助成を受けた団体を対象として7月8日に札幌市内で開催されました。

地域の資源を活かしたグルメ開発

活動名：「ハルユタカ」を活用したご当地グルメと

新商品の開発

今回の事業は、「食のおもてなし」という、土地の資源を活かしたメニューづくりを手がけてみようということが取り組みのきっかけです。いわゆる「ご当地グルメ」といわれているものです。

一つは、グルメ開発です。ハルユタカという地元の小麦を使って、さまざまなメニューを構成できればということでスタートしました。もう一つは、ハルユタカを使った特産品開発です。実施の主体となる地元の事業者、飲食店の方々に対する意向調査から始めました。皆さん大変関心が高く、ぜひ取り組んでみたいというやる気を感じられました。単発で終わらない継続性を持った定番メニューとして長く残る形にしたい、自然素材の味を大事にしたいというような、いろんご意見がありました。最終的には11種類のメニューが開発され、専門家などによって、さまざまな観点から評価を行い、試行錯誤の末、発表会



徳間 和彦 氏
下川町おもてなし隊育成協議会

を今年の2月に行いました。

一方、特産品の開発は、試作ですが小麦を使った焼酎を造りました。製造ロットの問題で酒蔵の選定に苦慮しましたが、道央の酒造メーカーに造っていただきました。また、小麦100%で造りたかったのですが、製造免許の問題でもち米を加えました。

また、今回の取り組みの中で「グルメマップ」を作りました。町内のお店や宿泊施設等に配布、周知していくということです。

ハルユタカは天候の影響を受けやすい品種で、昨年6月の長雨で壊滅的な打撃を受けました。そうした弱い部分を改善すべく新たな品種の開発もされていますが、代替原料の確保もあわせて考えていかなければいけないという課題があります。

自然と調和した庭園を作り、交流の場へ

活動名：コミュニティ花広場「RIMU 森のガーデン」づくり

平成21年7月に西興部の中心にある、ホテル森夢の北側の殺風景な荒れ地状態だった空間を庭園にすべく、村内の女性8名が集まり、「森のガーデン」というグループを立ち上げ、昨年4月から本格的に作業を開始しています。今年の活動は譲り受けた物置の移動から始まりまし



菊川 和子 氏
森のガーデン

た。壁に腐食防止の塗料を塗り、屋根を修復し、ガーデンニングの基盤となる道具をひとつおとりそろえることができました。

昨年植えた宿根草の芽が出始めた頃には、雑草もすごいことになっています。ブラシカッターでの草刈りは、1カ月に1度のペースで行います。

一番水はけが悪いところにワイルドフラワーの種を

まいて試してみたところ、3割しか花が咲きませんでした。

メンバーそれぞれ仕事を持っていて、みんながそろるのは難しいのですが、研修旅行も実施しました。東神楽町のガーデン「キャットミント」、美瑛町の「ゼルブの丘」、旭川市の「上野ファーム」、北見市の「香りゃんせ」の4カ所です。北見の「香りゃんせ」はハーブ畑です。私たちも畑の一角にハーブを植えましたが、ホテルの料理に使ってもらうことになり、活動の活力になっています。

ミニひまわりと思って植えたら、すごく背の高いひまわりが出てきてびっくりしました。今年もその種を採ってまいてみました。クロコスミアは水はけのよい場所を好むはずですが、西興部育ちの球根は水はけの悪い土地にも強く、長くきれいに咲いています。

2年目の今年も住民の方々から苗を提供していただき、種も購入し、色鮮やかな花々が咲き誇りました。

今後は、山野草の充実や、桜並木などの自然と調和した庭園づくりを心がけ、西興部村の交流の場をめざします。

地域包括政策と連携して事業化へ

活動名：「冬期集住・二地域居住」事業化支援

モデル事業



谷川 良一 氏
NPO法人グラウンドワーク西神楽

私どもの西神楽地域は、ここ10年で人口が激減。65歳以上の高齢化率は42%を超え、今年3月31日には旭川市内でトップという地域です。

離農した農家の空き家を改装、夏場、本州の観光客に貸して収入を得る。その収入で、冬の12月～3月の4カ月間、地域の一人暮らしのお年寄りに共同生活で安心して生活してもらうという事業です。人を雇用して、食事も昼と夜に1食500円で提供しています。それは地域の直売所が担ってくれています。今までの、ただ一緒に住めれば安心ということから一歩抜け出し、一緒に住むことでどのくらい違うか、医学的な検証をするため、食事のプログラムと運

動プログラムを作り、大阪大学と一緒に共同研究したのが今年の大きな仕事でした。

「冬期集住・二地域居住」という事業は、ほとんどが非営利でプラスマイナスゼロです。生活条件を確保するために、地域包括政策と連携してやります。

「交通新サービス」という公共交通の勉強会をとりあえず非営利で取り組み、日本財団に車両の申請をしています。問題は「デイサービス運営」で、営利事業として、民間の医療機関と連携して準備しています。「5万円でできる葬儀サービス」も営利事業です。ここが実はポイントで、一番稼げる事業です。この4本の柱をうまく絡め、事業展開することで運営は担保できるだろうと思っています。地域の人たちからいろいろなアイデアをもらいながら、やっていければと思っています。

地域の自然、文化、歴史を生かして人材確保へ

活動名：「十勝・鹿追ワーキング&ホリデー」

による若者支援

地域の資源である地域の自然や文化、歴史、あるいは産業、人材をどう生かせるかということです。鹿追町は酪農と畑作が中心のまちで、メガファームといわれる巨大な酪農家が多く、農業の生産力、経済力が非常に高い地域です。しかし、農業というと、なかなか従業員が集まらない。それをどう集めるかが大きな課題でした。



武田 耕次 氏
NPO法人北海道ツーリズム協会

牧場で、農業で働きたいという人たちが見てよく分かるような募集の仕組みを作りたいということで、牧場求人サイト「田舎暮らしのスズメ」というインターネットサイトを作りました。このサイトは「ここは働きやすいこういう牧場です」ということを、従業員の方にも参加してもらい発信するという仕組みです。この仕組みで現在、全国各地から年間70～80人来ています。

もう一つは、ワーキング&ホリデーです。まるきり農業をやったことのない人には、なかなか大変だとい

うことで、生活の手段はとりあえず農業に求めますが、農村で暮らすことの楽しさ、豊かさを実感してもらうということで始めたのが、「十勝・鹿追ワーキング&ホリデー」という仕組みづくりでした。受け入れ農家がこのところ少ないというのが実態ですが、去年は8人、今年はずでに10人ほど来て仕事をしています。そこで収入を得て、友達付き合いをしたり、地域の青年と交流します。

ワーキング&ホリデーは、楽しみながら働いて、農村で暮らす豊かさを実感してほしいという新しい価値観です。

地域の活性化は、事業を新たにどんどん作り上げ、雇用を生み出していく以外にはないと考えています。こういう活動を継続してやっていきたいと思っています。

貴重な産業遺産の保存で新たなまちづくりへ

活動名：三菱大夕張鉄道南大夕張駅ホーム補修事業

車両などの補修とともに、南大夕張駅ホームの補修に着手、延長80mの約半分が直っています。客車の補修作業は、会員の中にJR北海道の苗穂工場に勤めている職工さんや建具屋さんがいるので、窓枠の修理や屋根の塗装を手作業で進めています。



奥山 道紀氏
三菱大夕張鉄道保存会

昨年9月26日の「汽車フェスタ」では、地域住民と鉄道ファンの交流の場を設けています。ミニでもいいからSLを走らせようと、私どもの会を支援してくれる方がわざわざ盛岡からSLを積んで来てくれて走らせてくれました。

また、10月3日の「夕鉄バスで行く廃線跡ツアー」では、閉鎖されているSL館を公開したり、森林鉄道の橋梁を見学しています。

今年も7月にバスツアーを実施しますが、私たちは旅行業の許可がないので募集することができず、市民が企画したツアーということで朝日新聞がちょっと載せてくれました。その後北海道新聞にも掲載されたため申し込みが殺到し、PRを広げ過ぎて対応に苦慮しています。

夕張市は全国唯一の財政再建団体です。医療・福祉の切り詰め、市民流出が加速、会員の鉄道OBや夕張市民も高齢化しています。南大夕張駅跡の保存車両を中心とした公園計画が凍結されたのに加え、SL館も閉鎖となり、保守作業も大変になっています。鉄道や炭鉱遺産は夕張独自の文化的財産、地域遺産ですが、その保存・活用は財政難や人口流出により非常に困難な状況にあります。

このまちとともに生まれ、このまちの歴史と繁栄を支えた鉄道。夕張市南部地区に今も残る三菱大夕張鉄道の車両たち。私たちは、南部・大夕張地区の石炭産業の記憶を今に伝える、数少ない貴重な産業遺産の保存に取り組み、新たなまちづくりに活かしたいと考えています。

明治期に道内を旅する英国女性旅行家の軌跡を活用

活動名：バードが歩いた「札幌本道」の道標

ネットワーク形成事業

平成22年度は、「札幌本道」をキーワードとするネットワーク形成をテーマとして、「イザベラ・バードの足跡を訪ねる集い～室蘭・礼文華・有珠山編」と題した体験ツアーとフォーラムを2日間で行いました。



窪田 留利子氏
イザベラ・バードの道を
辿る会

「現地を歩く会」は、イザベラ・バードが歩いた足跡をもとに、室蘭市内と豊浦町、伊達市の3つの地域で行いました。1日目は、室蘭市の郷土史研究家の駒木佐助さんの案内で現地説明を受けながら、旧室蘭駅を出発し、港の文学館、室蘭港の明治天皇の乗船碑、そして札幌本道の出発地点となったトキカラモイ棧橋跡をまわり、旧札幌本道を辿りながら室蘭八幡宮までの2kmを歩きました。

2日目は、豊浦町郷土研究会の福田茂夫さんの案内で礼文華海岸、チャシをバスで移動しながら解説していただき、礼文華資料館では古道や礼文華峠の歴史のレクチャーを受け、その後、実際に礼文華古道の一部を散策しました。次に、有珠の善光寺に移動し、善光

寺の植生の遷移^{※1}については辻井達一先生から解説を受けました。

ツアーでは同時に、「イザベラ・バードを道標とする地域づくりとは」というテーマで、フォーラムを行いました。基調講演は、室蘭市出身の児童文学者で日本スコットランド協会会員の富盛菊枝さんによる『イザベラ・バードと私』。話題提供としては、有珠山の火山活動の研究を専門としてきた堺幾久さんの『バードが見た有珠火山と樽前火山—自然と歴史を読み解く—』。また、パネルディスカッションでは、『イザベラ・バードが歩いた室蘭と、これから歩む地域づくり』をテーマに5人のパネラーにそれぞれの活動についてお話しいただき、今後の地域づくりの生かし方について意見交換を行いました。

また同時開催として、パネル展を『室蘭市港の文学館』で行いました。このパネル展は、これまで函館、札幌、平取に続いて4カ所目の開催となり、紀行文『日本奥地紀行』を視覚化した展示になっています。

今回で4度目になる体験ツアー「現地を歩く会」は、事前に地元の協力者、関係者に声をかけて、入念な情報収集、調査を行い、地域間のネットワークづくりにつながったと感じています。特に今回は「札幌本道」に焦点を当てたことで、当時の時代背景の理解を深めるきっかけになったと思います。

今後も地域の歴史や自然環境を学ぶとともに、北海道ならではの様々なキーワードを掘り起こし、地域再生の新たな可能性を色々な角度から見詰め直す試みを重ねていきたいと思っています。

森林ウオーキングでメンタルヘルスケア

活動名：森林資源を活用した「森と健康プロジェクト」



星 貢 氏
しらい森林療法研究会

しらい森林療法研究会は、自然ガイドの団体「めむの会」と「一樹会」、健康ウオーキングの団体「春もみじの会」の3団体の連携で、それぞれの課題を解決し、さらに町内に森林のよさや森林の持つ効能を伝えていけたらと思い設立し、その目的達

成のために三つの事業を行いました。

その一つが「森の健康相談室」です。身近なところにポロト湖があり、奥にポロト自然休養林という森林が連なっています。そこで日常的にウオーキングをしている方を対象に、駐車場に仮設のハウスを設置し、ウオーキング前後の血圧の測定データを収集しました。2カ月実施し、保健師さんが毎月1回ずつ血圧のデータを参考にしながら健康相談するという事業でした。これにより延べ399名の血圧測定結果が得られ、ウオーキング後に正常値に変化した方が25%、正常値ではないが、下がったという方が47%でした。その結果を基に、ウオーキング前後の血圧変化のグラフを示し、森林療法がどうしていいのかというパンフレットを作成、町民や町外に配布しました。

二つ目は、「森林ウオーキング事業」です。秋と冬の2回実施しています。自然ガイドの私たちの団体が案内役をして、ウオーキング前後に保健師さんなどの協力で血圧の測定などをした事業です。常時ウオーキングをしている人ばかりとは限りませんが、ウオーキングで血圧が下がったという人は90%を超えました。冬は2月に、白老から大滝に13~14km入った辺りの森林を利用し、スノーシューと歩くスキーのグループとを分け、コースも違えて実施しました。結果は、77%の方が血圧が何らかの形で改善されたという結論になりました。

三つ目は、「森林療法研修会」です。森林療法の分野で高名な東京農業大学の上原巖先生に来ていただき、ポロト自然休養林をゆっくり歩いた後、「森の座談会」を開き、参加者のかかわり方、個人としてどういう利用をするかについて話し合いをしました。

森林ウオーキングには血圧を改善する効果が期待できることを数字として実証することができました。白老町には森林療法に取り組むよい環境が多いことが改めて分かり、そのことを町民にも伝えられたと思っています。今後も、メンタルヘルスケアという分野で森林の利用を呼びかけ、より多くの方が身近で素晴らしい自然に触れる機会を作っていけたらと考えています。

※1 遷移

うつりかわること。生物学分野での遷移とは、ある環境条件下での生物群集の非周期的な変化を指す。例えば、野原に草が伸び、木が生えてきて、森林になるような変化。

都市との交流による体験・滞在型のまちづくりへ

活動名：くろまつないフットパス魅力アップ事業



工藤 睦美 氏
黒松内町農山村資源活用地域協議会

都市との交流による体験・滞在型のまちづくりとして、平成元年に「北限の里づくり」がスタートしました。ところが、ドライブ観光・通過型では町のよさが分からないという、本町まちづくりアドバイザーの小川巖氏の提言により、平成16年6月にフットパスの取り組みがスタートしました。その際ボランティアを募り、現在29名のボランティアで活動しています。

平成22年度には、新規コースの調査、海外研修とともに、5月に「第12回全道フットパスの集い in くろまつない」を開催、9月には「第13回全道フットパスの集い in びらとり」に参加、10月には「第3回日本フットパス協会フォーラム&ウォーク」を開催しました。

平成23年度は、ボランティア会議を開き、5月に春のイベントを開催、6月の海外研修にはボランティア1名が参加、7月に夏のフットパスイベントを開催、10月には「第4回日本フットパス協会シンポジウム」に参加予定です。そのほか「第14回全道フットパスの集い in さっぽろ」に参加予定です。

今回、助成金のおかげでフットパスマップが完成しました。全部で4コースあり、マップを見ながら自分の行きたいコースを選んで一つずつ回ることも、時間があれば全コースを回ってみることもまた楽しみ方の一つではないかと思えます。

地域と連携して体験観光で地域の活性化へ

活動名：豊浦町まるごと自然体験学校

私たちは3年前から、漁業体験、農業体験、自然体験を中心とした体験観光ということで、修学旅行の誘致をしています。昨年度は修学旅行だけで約4,000人、今年度も順調に伸びています。ただ、修学旅行から始めたので、逆に一般のお客様が少



乳井 亜矢子 氏
NPO法人自然体験学校

なく、豊浦町だけでは集客が難しいということで、洞爺湖温泉と連携して一般のお客様に来てもらう目的で今回の事業を行いました。

事業の内容は「サマーランド・スノーランド構想」と「洞爺湖温泉街との連携」です。プログラムを作成、旅行会社や学校へのPR活動を行いました。

サマーランドは、豊浦町の実験公園でやる予定でしたが、北海道の管轄で許可の問題から実施は難しいということになり、今回は、範囲を広げ洞爺湖温泉でやることにしました。宿泊客をターゲットに、早朝の熱気球体験を行ったり、洞爺湖の水の上を歩く「ウォーターウォーク体験」を目玉に行いました。これは、直径2mぐらいの大きな特殊なボールに入って水の上を歩くというものです。北海道では初めてで、テレビの取材もありました。

スノーランドは、毎年「北の収穫祭」というお祭りを実験公園でやっていますので、それに合わせることで、役場と協力し、道の許可を得てやることができました。内容は、イグルー、スノーモービルにカヌーをつけたスノーカヌーの体験、少し離れた場所でオオワシとオジロワシが見られるということを見つけて、それを見るトレッキングのツアーも行いました。

成果としては、プログラムの開発に伴い、いろいろな旅行会社に視察に来ていただきました。本年度、JTBのオプションツアーに熱気球とウォーターウォークの体験が取り上げられ、順調に来ていただいています。

課題は、洞爺湖温泉も国立公園の中にありますので、許認可、体験する場所の確保、こういった形で集客をするかということです。

今後の取り組みとしては、新しいプログラムの検証や洞爺湖の方は世界ジオパークに認定されていますから火山などをメインとした体験学習のプログラムを作成することを考えています。

いずれにしても、豊浦だけでは集客ができませんので、洞爺湖温泉や登別市、西胆振を中心にお客様に来てもらい、そして豊浦にもお客さんが来るという流れで交流人口を増やす活動を続けていきたいと思っています。